



2014年 5月12日

病院の担当医師から突然電話が掛かってくる。至急来院されることを通知される。その理由を聞くが、電話では話せないとのこと。2014年 2月19日に胆のう胆石手術で胆のう切除していた。その件なのか心配になる。5月15日に妻と一緒に行くことを伝える。医師から15日以後の仕事などすべてをキャンセルするように伝えられる。(胆のう胆石削除手術を2014年 2月19日入院、21日腹腔鏡手術、25日退院)

2014年5月15日

妻と一緒に病院に行く。胆のうにがん細胞を発見したと通告される。他の臓器への転移可能性は50%。特に胆のうと密着している肝臓とリンパに転移しているケースが多いということで、肝臓を約2センチとリンパ切除の手術をすることを通告される。入院5月23日、手術26日予定。その前に5月21日に画像によるがん転移を確認するPET検査を受けることになる。入院に関するさまざまな治療に関してケアー担当医師から説明を受ける。茫然としてほとんど耳に入らず。

PET (陽電子放射断層画像法) 検査とは？

PET検査とは放射性フッ素で標識したブドウ糖を用いたがん検査。がん細胞が活発にブドウ糖を取り込む性質を利用して放射性フッ素で標識したブドウ糖の体内分布からがんを写し出す方法。放射性フッ素で標識したブドウ糖はブドウ糖に良く似てがんに取り込まれやすい性質がある。放射性フッ素で標識したブドウ糖から出される微量の放射線をPETカメラでとらえて全身像を撮影するが、そこではがんの部位が放射性フッ素で標識したブドウ糖の集積像として検出される。つまり、がんの部位が全身像に点として表示される(PETパンフレットより抜粋)



2014年 5 月21日

21日午前PET検査を受ける。検査1時間前に水を500CC飲む。一部屋に同じ検査を受ける男性6名がいる。全員安静状態で検査の名前を呼ばれる前まで待つ。他の男性の不安に満ちた表情。それは自分の表情の不安感が写しだされているように思える。この日はPET検査を受けた後に心電図、呼吸、麻酔科の検査を受ける。他の検査途中に担当医師からPET検査の結果はがん細胞が転移していないことを通告される。思わず目頭が熱くなる。まずは画像でがん転移がなかったことを確認できる。妻と一緒にひと安心する。

2014年 5 月22日

妻と一緒に5月21日のPET検査結果内容について担当医師から詳細を聞く。26日の手術内容についても聞く。胆のうがんが肝臓、リンパ腺に転移しているかもしれないのでそれを切除し転移を事前防止する手術とのこと。手術に関しては覚悟がすわる。今回の入院期間は15日～21日と通告される。今回は長期間の入院なので2人部屋にする。前回7人部屋にしたところいびきに悩まされる。

床屋に行く。髪を短く切る。入院雑貨を用意する。洗面用具(歯磨きセット、せっけん、ひげそり、シャンプーなど)、食事用具(箸、スプーン、ストロー付プラスチックコップ)、下着(パンツ、ステテコ、アンダーシャツ)、室内履物、タオル、バスタオル、寝間着はレンタルする。腹を切るので腹帯を購入する。

手術前の2014年 5 月23日～25日まで

入院手续をする。入院保証金10万円を支払う。

点滴をするために右手に点滴針を刺さされる。担当医師、薬剤師、麻酔医師、手術担当医師など何人もの医師が手術内容の説明に来る。担当医師、担当看護師の名前を覚えるように心がける。必ず医師の名前を呼ぶ、看護師の名前を呼ぶことで自分を覚えてもらうようにしようと決心する。名前を覚え、声をかける時に名前をいうことで手術後に医師、看護師とのコミュニケーションがはかれた。終日安静で点滴。腹帯を購入する。手術時に履く靴下を買う。手術前日の午後8時に風呂に入る。



2014年 5 月26日

午前8時30分から手術。妻と一緒に手術室まで歩いて行く。手術室のドアの前で妻と別れる。握手する。手術室に入る前に看護師、麻酔師から麻酔の内容を説明されるがほとんど記憶なし。手術室に入る。天井を見る。映画で見る手術室の状況と同じだと思う。と、ここから記憶がなくなる。麻酔が醒めてからノドが熱くなるほど乾く。腹帯をする。横隔膜からヘソ下まで約25センチ切創したとのこと。後日、その傷跡を見てビックリする。妻は切除した肝臓の一部とリンパ腺を担当医師から見せられたと後日教えてくれた。

2014年 5 月27日

手術明けの朝、ノドが乾いて水がやたら飲みたくなる。安静状態が続けなければならぬからストロー付のコップに水を注いで飲む。病院内を看護師の背なかに両手を置いて一緒に歩く。看護師によると回復を早くするために安静状態にいるよりか手術した翌日にすぐ歩くようにするとのこと。きつい。でも、早く治すためには頑張らねば。

向かい病棟の屋上で入院患者の一人がラジオ体操をしていた。子供の頃にラジオ体操を覚えたのだろう、第一体操を始から終わりまできちんとしていた。ぼんやりと眺める。いつになったらラジオ体操ができるかな……。

2014年 5 月28日～31日

担当医師から切除した肝臓とリンパ腺を病理検査したところがん細胞が転移してなかったと報告を受ける。妻と一緒にひとまず安心する。

気持ちが楽になるとともに野球を見たいという気持ちが湧きおこる。病院の談話室からいつも通っている球場方向を見て野球を思い浮かべる。週間ベースボールマガジンを購入する。ところが、急に熱が39度になる。解熱剤を点滴される。CTとMRI検査をする。熱の原因がわからず。手術傷跡が痛む。鎮痛剤を点滴する。熱は微熱が続くが、容態はやっと落ち着いてくる。



2014年6月1日～5日

入院していると退屈である。2人部屋の同室患者の方と会話を始める。

同室患者の方は腹膜炎で救急入院したとのこと。年齢は68歳。私より2歳上。救急車で運ばれてすぐに手術をしたとのこと。雑談しているうちに健康保険のことを知っているか仕事柄質問する。例えば、限度額適用認定証を知っているかを聞いた。知らないとのこと。高額療養費制度も知らなかった。高額療養費貸付制度もしらなかった。国民健康保険なので傷病手当金は受給できないがそのような制度があることを聞くが、全て知らなかった。

この患者さんは6月4日に退院した。退院の際に医療費を払わなければならない。限度額適用認定証を会計に提示していれば30～40万円で済む医療費を約80万円払うとのこと。現在お住まいの役所で国民健康保険課に行って高額療養費制度で請求することを教える。高額療養費貸付制度についてを教える。

2014年6月6日～8日

右腹から体液を体外に出すパイプを取る。風呂に入り、シャワーを浴びることができるようになる。野球仲間が見舞にくる。野球雑誌などを見舞品に持ってくるが読める気にならない。手術後は体調が良くても本を読む、会話をするととても疲れる。同部屋に新たに患者が来る。胃の全摘出手術を受けた患者。この方も限度額適用認定証や高額療養費制度を知らない。その後、別の部屋の患者に限度額適用認定証や高額療養費制度を聞くが、はじめて入院した方は知らないケースが多かった。一方、何度も入院している方はこれらの制度を知っていた。

4日に生保のおばちゃんが診断書を持ってくる。それ以外に見舞品としてペットボトル500ccの水を5本持って来てくれた。本、雑誌などの見舞品より水が一番うれしかった。退院のために血液検査、レントゲン検査をする。担当医師から8日退院してもよいとの許可を得る。